

我が家の読み聞かせ

中田 真也子

我が家の5人の子供たちは、みんな自然の中で遊ぶのが大好き。生き物が大好きです。また生き物を取り巻く環境や昔の人々の生活にも関心があります。

それは毎週末、緑の多い公園や山登りに連れて行くというのがありますが、毎月約20冊10年以上（合計2000冊以上！）続けてきた読み聞かせの効果かもしれない、と思っています。

本を読み聞かせることは、様々な知識を広げるだけではなく、親子で共感したり、時にはお互いの考え方の違いを知ったりして、親子のコミュニケーションの場にもなります。また、沢山の本に触れることで子供達に（そして親にも）自分を取り巻く環境に興味を持つ力が育っている気がするのです。

今回は、10年以上続けてきた読み聞かせの方法やその時、子供達のお気に入りだった本を紹介したいと思います。

長女0歳のときから始めた読み聞かせ

読み聞かせを始めたのは、長女0歳のときです。きっかけは、TVでみた番組です。ある少女が重大な脳障害を持って誕生しましたが、両親の0歳の時からの読み聞かせによって、一生不可能と言われた読み書きも出来るようになり、学校に行くこともできたという話を見ました。なんでもすぐ実践してみる私は、「こんな効果があるなら、健常児にも効果があるのでは？」と思い毎日2～3冊づつ幼児向けの絵本を時間があるときに読み聞かせるようになりました。不思議なもので、

言葉がまったく分からない産まれたばかりの乳幼児も読み聞かせを楽しんでいるように見えました。私は、初めての子育てで昼間子供と二人の時間も長く、自分の癒しにもなるので、長女の機嫌よく起きている時間を見つけると、絵本を読んでやりました。



0歳の長女と『ももたろう』を読んだ

長男・次男が産まれても続いた読み聞かせ

読み聞かせの習慣は、次に長男、次男が産まれても続けました。続いた理由は、読んでいる親も楽しかったから。色んな絵本を読むとこんな描き方もこんな表現もあるんだ、と大人の私も感動することがよくありました。そして子供たちの反応がまた面白いのです。大人の私が面白いと思うところと子供達が面白いと思うところが一緒だったり、違っていたり。そして子供たちのコメントや質問が楽しいのです。子供たちは、私が、読み流してしまうところも細かく気づいて、逆に色々なことを教えてくれました。

毎月40冊を図書館で借りて読む

そんな風に続けているうちに、毎月数冊買っていた絵本のせいで、絵本用の本棚は満杯になり、とんでもないことになってしまいました。そこで、家から歩いて行ける図書館のカードを家族全員分作り、毎月約40冊借りられるだけ借りて、その中で子供が好きな本と私(母)が好きな本を順番に読んでいくようになりました。



図書館では毎月
20~40冊の本を
借りた

今の図書館はとても便利です。ネットで蔵書の検索ができて2~3日で取り寄せができます。子供や私が気に入った本があるとシリーズで何冊も借りて読んだりもしました。

読む時間

読み聞かせは、毎日寝る前、9時~9時45分ごろです。小さい時は、子供はなかなか寝たがらない時期があるので、「読み聞かせが終わったら電気を消しておやすみ〜。」と決めておくと、寝かしつけにもなりました。今は子供も成長しましたが、この習慣が続いています。

読む方法

我が家は子供たちは5人いっしょに子供部屋で寝るので、そこで読み聞かせをします。子供たちは、読み始めても最初は集中して聞かないことが多いのですが、読んでいくうちにだんだん落ち着いて聞くようになります。

毎日、2~5冊の本を読みます。(最近は長

編が増えたので、1~2冊になっています。) 私は、どんな本も、あまり抑揚をつけず、ただ一音一音ゆっくりはっきり読む様になっています。その方が日本語そのものが持つ味が伝わってくる気がしますし、聞いている方も落ち着いて聞けると思っているからです。

本を読みながら子供達から(母からも)沢山の疑問や意見が出てきます。それは、読むのを中断して、聞いている皆で議論します。また読み進めながら時々母からクイズを出したりもします。「さあ、この後主人公は何をしたでしょう?」「なんで主人公はこんなことをしたのでしょうか?」など。それに対して子供たちは、一人一人自分なりの答えを言います。最後に母から正解を発表すると、子供たちは一喜一憂します。

どんな本を読み聞かせるか

■読み聞かせる本のジャンル

子供が好きな本と母が好きな本、両方読むようにしました。

母が好きな本

- ・児童向けドキュメンタリー本(世界の子どもたちの生活、戦争体験談など)。
- ・最近発見した生き物に関する本
- ・伝記
- ・学校の授業、家族旅行で訪れた場所に関する児童向け図書

子供が好きな本

- ・紙芝居
- ・落語など笑える絵本
- ・絵が可愛い絵本
- ・幽霊、妖怪の本

好みははっきり分かれるのですが、両方読むと、両方面白いことを発見するのです。自分が好きな本以外の面白さも発見できるのが読み聞かせのメリットの一つだと思います。

■読み聞かせる本のレベル

我が家の子供たちの年齢差は、一番下と一

番上が6歳半（今は長女が読み聞かせを卒業したので今は4歳半）。そのため、好きな本のレベルも変わってきます。そこで、毎日一番年下に合わせたレベルの本（絵本など）と、一番年上に合わせたレベルの本の両方を必ず読む様にしました。

一番上に合わせた本となると、長編の字だけの本が多くなります。それは、毎日少しずつ数回に分けて読みます。子供たち成長するにしたがって全員絵本よりも長編の本がだんだん好きなり、今では、こちらが主流になっています。

読み聞かせ卒業

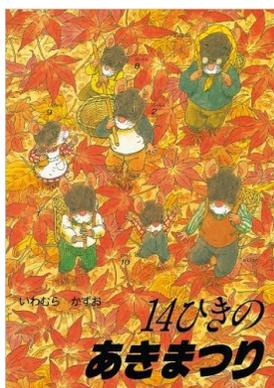
長女が中学生になるとき、とうとう読み聞かせを卒業しました。それまでは、兄弟姉妹全員一緒に聞いて、一緒に寝る、ということが続いていたので、いきなりの卒業は驚きましたし、寂しく思いました。読み聞かせは終わりましたが、今も長女が以前読み合わせた本のことを話したりするのを聞くと、読み聞かせた内容は一生残るのではないかと感じています。

読み聞かせて親子で感動した本

親子でお気に入りの本は沢山ありますが全部はご紹介できないので、我が家で2012～2015年に親子で感動した本の一部を紹介します。

1. 「14匹の」シリーズ いわむらかずお著

ねずみのおじいさん、おばあさん、おかあさん、おとうさん、きょうだい10匹の14匹家族のおはなし。双子が産まれて大家族になった我が家に私の姉が、11冊セットでプレゼントしてくれました。ねず

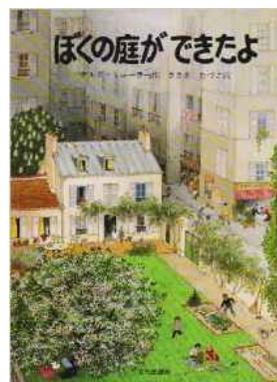


みが可愛らしいだけでなく、自然の描写が細かくて美しい本です。

そして1冊1冊ストーリーも楽しい。読んでもらいながら、子供たちは色々な花や虫を絵の中で見つけて喜びました。「ぴくにつく」（春）、「おつきみ」（秋）や「せんたく」（夏）、「そりあそび」（冬）など、季節に合わせて読むとまた良いのです。「あきまつり」の巻は、きのこに溢れています。（2007～2015年読み聞かせ）

2. 『ぼくの庭ができたよ』 ゲルタ ミューラー著

都会の中の広い庭付きの古い家に越してきた家族のお話。荒れ放題だった庭が、家族で芝を育て、畑や花壇を作り見事によみがえっていくの様子が描かれています。畑や花壇は子供が中



心になって作っているの、聞いている子供達も自分たちが育てているような気分になるようです。庭に一本だけ残っていたりんごの古木が男の子の夢に出てきて、昔の家の様子を語る場面は、子供たち真剣に聞いてました。（2012年読み聞かせ）

3. 『森の幼稚園 —シュテルンバルトがくれたすてきなお話』 今泉 みね子・アンネッテ マイザー著

4歳～11歳の5人の子供が熱心に聴いていました。大人が読むには物足りないぐらいの内容ですが、子供にとっては丁度良いようです。この本を読んでいると、ドイツ

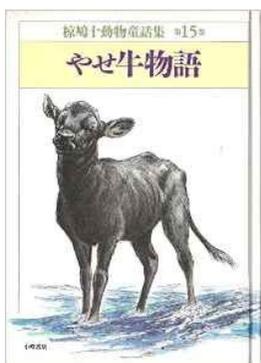


の森をゆっくり歩いている気分になれます。

日本の森と共通点もあるし、違う点もある、そんなところが興味深いのです。また私達家族も毎週末千葉の公園の森を歩いているけど、こんなにゆったり味わってないかな、と反省。森の中の植物や石、土を触ったり、匂いをかいだり、もっとゆったり森を歩いてもいいのかなと思いました。(2012年9月読み聞かせ)

4. 『やせ牛物語』 椋鳩十著

椋鳩十の動物記は、いわばシートン動物記の日本版。子供たちはどちらも好きですが椋鳩十の方がより好きかもしれません。小学校5年生の教科書にも登場するのですが、皆さん意外



と知らないですよ。その良さは、

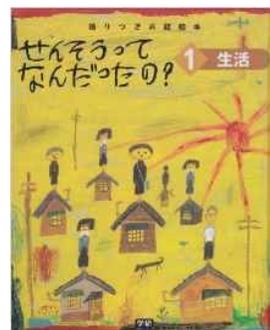
- ・著者は、明治～昭和を生きた人なのですが、その頃の日本の自然や生活の様子が子供にも分かりやすく優しく描かれている。
- ・動物の気持ちが細かく描かれていること（ちょっと科学的に正しいのか？の部分もありますが、それはシートン動物記も一緒だと思います。）
- ・文章が流れるように読めて、しかも力強い！物語を実況中継しているようで、読んでも私も気持ちがいい。

といったところでしょうか。我が家では椋鳩十の童話は沢山読んでますが、特に今回読んだ「やせ牛物語」は、今まで読んだ中で一番感動した気がします。

4回ぐらいに分けて読みましたが、毎回子供たち全員から「もっと読んで!!!」コールすごかったです。(2013年7月読み聞かせ)

5. 『語りつきお話絵本 せんそうってなんだったの?』

子供に読み聞かせ、良かったと思うシリーズです。全8巻。1巻の中に2話ずつ、色々な絵入りの話が入っていて、第二次世界大戦の戦時中の生活の様子、戦士の生活、人々の気持ちがリアルに描きだされています。

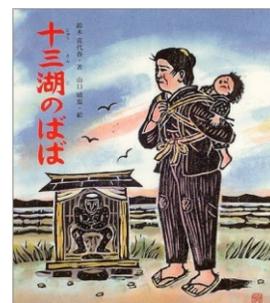


どれも、実体験に基づいて作られたお話です。でも子供が読むために主人公は最悪の結末にはなっていない（ハッピーエンドが多い）ので、子供が怖がらずに読めます。これ大切！怖がってまったく読まないという意味がないです。戦争の悲惨さ、戦時中の貧しさ、貧しいながらも生き生きと生きる子供たち、逆に現代生活の過剰な豊かさ、そんなことを子供と一緒に考えるきっかけになります。

このとき失敗したのが、絵本の巻末の解説にあった戦争体験者の本当のお話を三女（5歳）に話してしまったこと。「自分の娘を背中に背負って空襲の中を逃げたら、娘がいつのまにか死んでしまったんです。夕焼け空を見ると、今もあの時の悲しみがよみがえってきます。」その話を聞いた三女は、その夜何度も泣いて起きてきて大変でした。最終的にお兄ちゃん（次男7歳）と一緒に寝てもらってなんとか眠れました。子供って繊細なんですよね。(2013年7月読み聞かせ)

6. 『十三湖のばば』 鈴木喜代春著

夏休みに青森旅行した後、たまたま図書館で見つけた「十三湖のばば」は、大正から昭和の農家の話。子供たちも青森の話というので、読み始めたの



ですが・・・その過酷な生活にびっくり。

80歳のおばあさんが語った自分の11人いた子供のうち8人と旦那さんが貧しさの中で死んでいくという・・・最初から最後まで死んだ時の様子を書いた話なんです。最初は私も涙しながら読んでいたのですが、怖い事に、だんだん子供も私も子供が死ぬことに慣れてしまって、今度はどうやって死んじゃうのかな？と普通に言うようになってしまいました。

本当に昔の農家は重労働だったんですね。年貢の重圧もすごい・・・自然が豊かな昔が良かったなんて、簡単には言えないと実感しました。話の中で小学生ぐらいの子供が死ぬほどつらくても親を手伝っていたという事が何度も出てきて、読んだ後、なんだか子供たちが素直に手伝うようになった気がしました。

時々出てくる津軽半島の風景や気候が、訪れた下北半島とそっくりで目にうかびました。(2013年9月読み聞かせ)

7. 『ねこのごんごん』 大道あや著

100歳近くになった「ちゃん」と子ねこの「ごん」の関係がなんだか昔のおじいちゃんとおばあちゃんと



孫の関係を思わせます。ゆったりとした時間の流れと、老猫「ちゃん」の厳しいけれどやさしい口調がいいのです。

また絵がいい！大胆なタッチの色鮮やかな素朴な絵の中に沢山の生き物が隠されていて、子供たちは見つけては喜んでいました。(2013年12月読み聞かせ)

8. 『落語絵本 みょうがやど』 川端誠著

この川端誠の落語絵本シリーズは、大判で絵も分かりやすく面白いです。子供全員大好きです。図書館においてあるのは全部読み

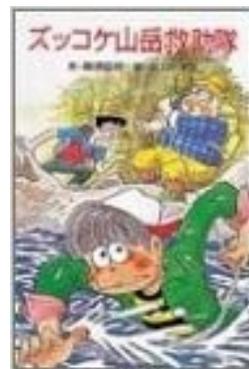
ました。私がシリアスなのが好きなのに、子供たちは笑えるものごとにかく好きなんです。

舞台は江戸時代のはずなのに何故か質屋にウルトラマンが売っていたり、宿でみょうがプリンが出てきたり、そんなおかしいところを見つけるのも子供たちは大好きです。(2013年12月読み聞かせ)



9. 『ズッコケ山岳救助隊』 那須正幹著

4月末に私が骨折した後はじめて読んだ本。家族で登山中の事故だったのでタイムリーだと思い読んでみました。これが思った以上に子供たちに大ヒット！



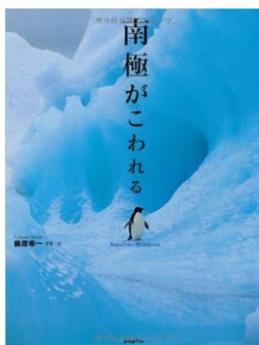
中国山地の山に子供会の夏合宿で行った子供たちが、予想しない天気の不慮で、普段は迷うはずのない山を大雨の中子供4人で彷徨い歩き、たどりついた小屋で誘拐された女の子と最後は誘拐犯まで助けてしまうという、すごい展開の話でした。

著者が大学時代山岳部時代の経験から描かれた内容は子供向けと思えないリアルさでした。私が骨折した山での装備は十分だったか？この話のように山中で迷子にならないにはどうすべきか？もし山の中で迷ってしまったら、本当はどうすべきなのか？(話の中の子供たちは、最高に危険な方法をとっても最後は助かっていましたが。) そんな話をしながら子供たちと真剣にハラハラどきどきしながら、この本を読みました。

(2014年5月読み聞かせ)

10. 『南極がこわれる』 藤原 幸一著

ある日、子供達が「国語の教科書の最後に紹介されている本が面白そうだから読みたい！」と言うので、図書館に予約してどさっと借りてきました。その中の1冊がこの本。長男(小学5年生)が自分で読んで「可哀想なペンギンの話だよ！」と他の子に内容を語っていました。



もう地球上に人間の手つかずの楽園なんてないんだ！これを読むと実感します。

南極は、真っ白な雪原が広がる場所・・・と書いていましたが、実は100年近くにわたり世界中の国が建設した基地やそこに持ち込まれた物資のために大量のゴミと汚染物質だらけ。ペンギンは、その中を歩き、なんとか生きている。温暖化が進み(なんと夏は15度になり雨も降る！)、露出した茶色い土の上で針金に引っかかり血だらけになるペンギン。イメージする南極と全く違う風景。でもそれが現実なんです。今は条約ができ、日本も含め各国は毎年持ち込んだゴミを持ち帰るようになったが、持ち込んだ分を持ち帰るので精いっぱい。以前持ち込んだゴミを持ち帰ることはできない・・・

著者は最後にいいます。南極で起こっている環境問題は世界中で起こっていることだと。だから解決に向かって「南極からはじめよう！」と。何をすればいいのか今は分かりませんが、「何かしなければいけない。」と親子ともども考えさせられる一冊です。

(2014年6月読み聞かせ)

11. 『お米は生きている』 富山和子著

このシリーズの『森は生きている』『川は

生きている』『海は生きている』も読み聞かせしました。どれも日本の自然環境—水と森と土の大切さについて語る真面目な内容なのですが、子供たちも大好きなのです。内容が歴史物語のような構成になっ

ていて理解しやすいからだと思います。また著者の力強く胸をうつような美しい文章が子供たちにも響くのだと思います。

この『お米は生きている』を読んで、私たちが最初からあると思っていた、平地の風景、川の風景、海の風景、山の風景、池や湖の風景が全部稲作をするために弥生時代から始まって祖先が何代にもわたって作り上げてきたものだと知りました。

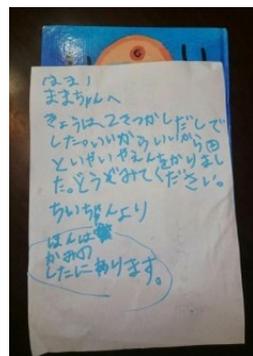
著者は最後に語ります。「今、日本の農業は救いがたいほど危機に瀕しています。それは、私たちが水や米などを得るために何百年にもわたり一生懸命維持してきた大切な土を捨ててしまうということ。そして世界には今までにない水や食料危機が近づいている。・・・その時日本、日本人は生き残れるのか？」最後の力強い著者の口調には、私も子供もぐさっと来ました。(2014年6月読み聞かせ)



12. 『いいからいいから』 長谷川義史著

私が帰りが遅くなった日、三女(6歳)からの置手紙が！私にどうしても読んでほしかったようです。

この「いいからいいから」シリーズ、我が家の小学生た



ちが大好きな本です。そして私も子供に紹介されて好きになりました。とっても呑気なおじいちゃんが「いーから いーから」と言い続け、貧乏神さんも幽霊さんもタジタジにして、最後はお友達になってしまうというお話です。大人もお腹から笑えて癒されます。(2014年7月読み聞かせ)



13. 『しっばいにかんぱい』 宮川ひろ著

ちょっと長いけど、テンポと内容がよくて最後まで読んでしまう本です。6年間リレー選手をつとめたお姉ちゃんが最後の運動会で大失敗して完敗。落ち込んだお姉ちゃんを慰めるた



めに、おじいちゃん、おばあちゃん、いとこたちが自分たちの失敗を打ち明けあって乾杯！最後に先生をしていた大おじさんが、自分の生徒を立たせっぱなしにして家に帰ってしまった大失敗を聞いて、とうとうお姉ちゃんも泣きながら笑い出して、立ち直る・・・という話。

子供がとんでもない失敗をして落ち込んでいるときにダイレクトに慰めるのではなく、こんな感じで励ませたら素敵ですよ。

宮川ひろさんの本にはじめて出会ったのは『びゅんびゅんごまがまわったら』という絵本。この絵本、親子で好きになり何度も借りて読みました。宮川ひろさんの本はストーリーが楽しいだけでなく、その後ろにある温かいメッセージが良いのです。(2014年8月読み聞かせ)

14. 世界のともだち『イギリス』加瀬健太郎著

この本は、ちょうど仲良くしていたお友達家族がイギリス行ったので読んでみました。主人公のブルーベルのイギリスの日常生活が、楽しく描かれています。特に学校の授業風景や町の風景などが、思う以上に日本と違うので面白かったです。



この「世界のともだち」シリーズは、次女と三女（双子・小学2年）が大好き。イギリスだけではなく、世界中の国の本があります。もう20冊以上読みました。借りてくると、双子たちは、まず自分で読んで楽しみ、その後、読んでもらってまた喜んでます。

一冊一冊別のカメラマンがそれぞれの国の一つの家族の取材した内容。その家族の一人の子を主人公として日常生活を描いているので、子供にとって身近に感じられて入り込みやすいようです。アフリカや南米の高地やモンゴルの高地でも子供たちがDVDを見て、携帯電話をもち、ゲームをしているのにも驚きます。(2015年9月読み聞かせ)

15. 「天と地を測った男～伊能忠敬」岡崎ひでたか著

この本は、江戸時代に全国測量をして精巧な日本地図を作製した伊能忠敬の生涯を描いた本。読み終わったときは、涙が出ました。親子で夢中になって読みました。



忠敬は、千葉県の漁村で生まれ、6歳で母に死なれ、父や兄弟とも生き別れながらも、強く生きる少年だ

ったとのこと。物心ついたころから数学が好きで好きで仕方がなかったとか。算術の才能を買われ佐原大商家に養子に迎えられ、天明の大飢饉を経験しながらも、伊能家を繁栄させたという。それなのに・・50歳を前に科学者として再出発。緯度1度分、経度1度分の距離を実測をもとに算出するため、過酷な全国測量の旅に出たという。55歳から73歳まで、病に侵されながらも終わることのなかった日本国土測量の旅は、今では信じられないような過酷な試練と冒険の連続。緯度を正確に算出するため、昼の測量だけではなく、夜の天体観測も行っていたそうです。子供に読み聞かせながら私も驚きました。

でも私が一番感動したのは、忠敬をここまで駆り立てたのは、地位でも名誉でもなく、世界に先駆けて地球の大きさを正確に測りたいという科学者としての目標だったということです。

忠敬には、江戸にいながら海外の書物を訳し、忠敬の研究を命を削って支えた高橋至時という偉大な先生がいたとのこと。崇高な目標をともにめざす同士がいたんですね。

江戸時代後半に、こんなに純真に科学的真理を追い求めた方々がいたなんて・・本当に驚きでした。子供達と佐原の伊能忠敬記念館に必ず行こうと約束しました。(2015年12月読み聞かせ)

伝記は親子ともども大好きなジャンルです。これまで読んだ伝記は『マザーテレサ』『二宮金次郎』『フェアブル』『安藤百福』『エジソン』『ノーベル』『手塚治虫』『牧野富太郎』・・・まだまだあります。

伝記を読んでいると、主人公の生きた時代が現代とは全く違う生活環境や社会環境であったことが分かります。また成功の裏にあった大変な苦勞(幼少に親を失っていたり貧しくて苦勞している人が多い)や迷いが身近に感じられて、親子でタイムスリップした気分になります。子供達は読み終わってしばら

く伝記の人を近所か親戚のおじさんかおばさんのように感じているようで、新聞やTVなどに登場すると盛り上がります。

読み聞かせを続けて良かったところ

我が家で読み聞かせを続けてきて良かったと感じているところは、以下の通りです。

- ・子供の理解に合わせて、読む速さや読む長さを変えられるので子供の理解が深まるし印象に残る。
- ・家族で同時に同じテーマを共有できる。日ごろ見るニュースなどの注目点が同じになり、日頃から親子で色んな話で盛り上がる。
- ・子供が本好きになる。
- ・色んなジャンルの本を読むので興味が広がる。今、関心のある地域や事柄に関する本を読んだり、逆に本に登場して興味を持つようになった場所を訪れると効果倍増です。
- ・学校の先生から「色んなことを知っているし興味があるので、生活や理科の授業を盛り上げてくれるので助かります。」とどの子についても言われる。
- ・親も一緒に本を通して今まで知らなかった世界に興味を広げることができる。

といったところでしょうか？

さいごに

先日、読み聞かせを卒業した長女(中学3年生)が「今でも読んでもらった本のこと沢山覚えてるよ。」「自分が本好きなのは、ずっと読んでもらったおかげだ。」と言ってくれました。

読み聞かせは、親子の大切な思い出にもなりそうです。